



がんサロンのパイオニア

〈石川県〉

北野 きたの 真実 まみ 55歳

「わしは子どもの時から、5段階の通知簿で、2か3しかもらったことなかったのに、病院に来て初めて「ステージ4」という数字をもらった。ついでに、先生は『あと6カ月です』と母ちゃんに言うたらしいけど、わしは先生の期待に沿えなくて申し訳ない。3年目を迎えてしても先生に謝つとる。『裏切ってますません』って」と笑う男性のYさん、63歳。院内のがんサロンで、とても明るく豪快に話された。

それを聞いた33歳のSさんの暗い表情が、パツと明るくなった。抗がん剤の治療中で、気持ちがとても沈んでいる時だった。「手術できるだけいいってことやぞ！」通知簿4になったら、そう簡単に医者にはメスを持たなくなるんやぞ」とSさんに話すYさん。ちよつ

とハスキーな声で穏やかな口調は優しい。この日を境に、Yさんと若いママであるSさんの信頼関係が育まれていった。

壮絶な治療の末、突然の肺炎を併発して、昨年3月にYさんは永眠された。がんサロンでどれだけの方々が、Yさんに励まされたことだろう。「こういう場所は、絶対大切や。病室でカーテンを閉め切つて、おとなしくしとるよりも、ここにきていろんな人と話したり、笑ったりするほうが、絶対元気になる。もつともつと、みんなこういう場所に来るべきや」といつもサロンの人たちを勇気づけていた。テレビ局から取材の依頼があった時も「いわゆる個人情報というものを伏せる必要は全くない」と言い、堂々と取材を受け、

全国に放映された。

Yさんの家は、石川県の能登半島。病院のある場所から車で約3時間かかる。お葬式の日、私はSさん夫妻とテレビ局のディレクターに出会った。Yさんの奥さまにお香典を渡そうとしたSさんの手を握り、奥さまはしみじみおっしゃった。「これを受け取ったら、お父さんに叱られるわ。『わしの大事な仲間や。いらん』って」。Sさんは、ポロポロと泣いた。

今、がんサロンにYさんの写真を飾っている。Yさんは、いつも見守ってくださっている。